風韻

第20号

（昭和五十五年度）

神戸大学風韻会

風　韻　第20号　目　次

◎　六十年の思い出（その二）……師　匠　　宇治正夫……3

◎　こ　の　一　年……会　長　　荒川祐吉……4

◎　先　輩　登　場

　○反復練習の功徳……旧　1　　藤井　茂……6

　○「息の長さ」が求められる80年代　…旧　5　　米花　稔……7

　○父の追想　……新　4　　里井三千雄……9

◎　昭和55年度行事予定……11

◎　学　生　投　稿

　○PM理論……姫路家次……12

　○ピアノのおけいこ……伴　　国……13

　○スキーツアー……紫鳳　　……13

　○模擬店「猩々」報告……A13……能勢恒男……16

◎　あしあと（昭和54年度活動報告）B29……反田雅之……18

◎　新役員紹介……20

◎　幹事長就任にあたって……T30……藤裏　聡……21

◎　第一回風韻OB会報告……22

◎　決算報告書……22

◎　昭和54年度先輩寄付金芳名簿……23

◎　名簿変更通知……24

◎　OB通信……25

◎　風韻会名簿……26

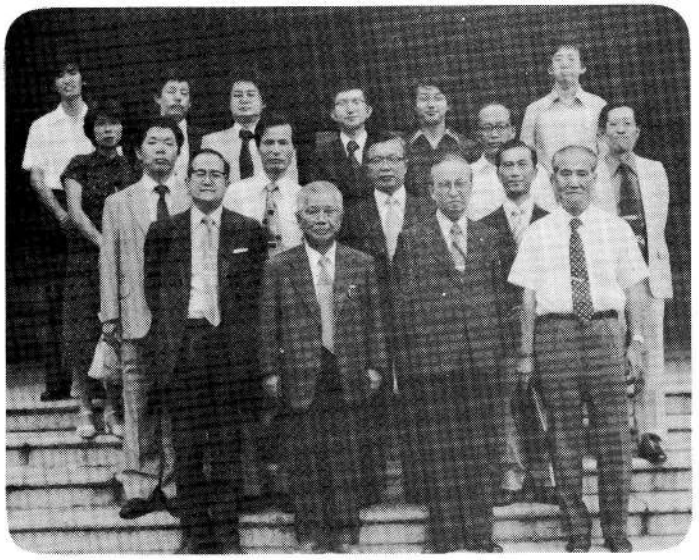
◎　伝言板……27

◎　編集後記……28

景清……宇　治　正　夫

昭和５４年９月１６日
於　　大槻能楽堂

夏 合 宿▶



◀O B 会

六十年の思い出（その二）

師匠　宇治正夫

思いのままに、順調に事が運ぶということは、誠に喜ばしい事であるが、これが必ずしも幸福であるとは言い切れない。

例えば、私共の世界では、声がよく出る、ということは非常に気持ちよいものであるが、しからざる時の事の方が多いものである。よく出る時は、苦労なしにすらすらと運ぶもので誠に気持ちよく、いかに努力しても、どんなに苦労しても思うように声の出ない時の苦しさ、いかにして声を出すか、という努力は大変なものである。

この体験で最も苦しい思いをしたのは、昭和十九年の冬、どんなに努力しても声が出ず、数ケ月苦しみぬいた結果、声帯にポリープができたためとの診断を受け、よい先生を探すために東奔西走、京都府立病院の中村先生が、日本一との定評を聞き、故福王茂十郎先生の紹介を得て、二週間入院した。その手術の大変なものであったこと、また、術後二週間発声を禁じられ、筆談で用をたし、無言の行を続けて、二週間めに始めて声を出した時の嬉しさは筆舌につくせるものではなく、天にも昇る心地がしたものである。

この貴重な体験を通して言えることは、この声の出ない間のたとえようのない苦しみ、これにうちかつための大変な苦心、努力である。いかにして腹力を養うかについて、日夜精進、努力を重ね、少しずつ腹力を養う工夫をし、それまでに果たし得なかった呼吸の扱い方、変化、緩急、息つぎ等を自得することができた。

苦しみを通じて自得したこれらの成果は何物にもかえ難い宝であり、思うように声が出ていたとしたら到底得ることはできなかったであろう。謡に限らず、人生のことすべて思うままになるものではない。大切なことは、この思うにまかせぬことに屈せず、それを乗り越える努力を怠らぬことである。そうすれば必ず一層高い境地が開かれてくるものである。苦しみを超えてこそ、苦しみのない境地が得られるというのが、私の体験から得た信念である。

この一年

会長　荒川祐吉

厳しかった寒さも、三月ともなればさすがに和らいで、陽光も急に輝きを増してきたように思えるこの頃です。

この一年間で、わが神戸大学風韻会にとっての最も記念すべきできごとの一つはＯＢ会の発足でしょう。かねてから、どのようなクラブやサークルにもＯＢ会があるのに、わが風韻会にはそれがないことについて、現役学生諸君の中に、ＯＢ会を待望する声が強かったわけですが、御承知のように、神戸大学風韻会は、もともと現役とＯＢを一体とした組織であって、その現役部が、大学のサークルとしての風韻会になっているといった関係から、特別にＯＢ会を必要としないといった感じがあったことも否定できません。しかし、現役部があるなら当然ＯＢ部もあって然るべきであるし、また現役時代、共に精進した仲間が、卒業して、謡を休むことになると、お互いに顔をあわせる機会を全く持てないのは誠にさびしいことでもあるということで、卒業して謡を続けているか否かにかかわらず、相互の親睦と、現役との交流をめざしてＯＢ会を発足させようということになったわけです。これには、新制ＯＢの先輩格である牧、里井、堤、原、段野等諸兄の献身的な努力と、藤井茂前会長や、旧制の大先輩である米花稔名誉教授、等の熱心な御支持により、昨年九月一日、蘇州園にて、西尾大先輩をはじめ多数の先輩にお集まりいただいて創立の会を持つことができました。

長年の念願がこうして叶ったわけです。これからこのＯＢ会の活躍によって、初期の目的が着実に達成されていくであろうことを期待しています。その成果は、既に徐々に目にみえてきています。いつも宇治先生から、秋の研究発表会や春の歓送謡会に、先輩の出席が少ないことを指摘されていましたが、今度の歓送謡会番組にもみられるように、先輩の出席も増え、また会後の懇談会には、出席されなかった先輩、あるいは謡会自体には仕事の都合でおみえいただけなかった先輩方も多数参加して下さるようになってきました。

ＯＢ会発足という記念すべき出来事と並んで皆様方に御報告しておきたいのは、現役の神戸大学の教官で、私より若い層には、どなたも謡をお稽古されている方がおられなかったのですが、藤井、米花、両先輩の御力で、経済学部の村上敦教授と経済経営研究所の井川一宏助教授とがお稽古をはじめられ、村上教授は現在御健康の関係で一時お休みですが、井川先生は、既に何度か宇治先生のお社中の謡会に出られ、また、今度はじめて、卒業生歓送謡会に御出演下さることになったことです。実際に謡をやっている現役教官が会長となり、また、サークルとしての風韻会の顧問教官となるというわが風韻会の伝統は、これで引き継がれる期待が強くなりました。顧問教官がいわば「プレイング・マネージャー」であるという事は、何かにつけてプラスに作用するものであり、この伝統は守っていかねばならぬと念願しています。それに、ＯＢである教養部の夏目隆教授も、謡を再度おはじめになる気持ちをお持ちと承っています。

このようにして、地味ではあるが着実に、わが神戸大学風韻会は組織面でも前進をとげることができました。しかし、近い将来外部から問題が生じることも予想されます。というのは、大学全体で、今、学生の福利・課外活動施設の整備を計画しており、差当って現在各サークルの使っている老朽建築物の撤去と建て替えが日程に上ってきているからです。現在の風韻会の稽古場は、早晩撤去されます（三年位は大丈夫と思われますが）。それに代わるべき稽古場を何処へ、どのようにして確保するか。このことが大きな問題です。勿論学内に文化系サークルを収容する施設が新しく造られるわけですが、文化系とはいえ、風韻会は、現実に一定の広さの稽古場を、室内に確保せねばならないわけで、その点例えば〇〇研究会といったものとは異なっています。現在尚新しい課外活動施設をどこにどのように造るかについては、学生部で全くの「素案」が作られた段階にすぎず、補導協議会や各学部特に六甲台建築委員会との話し合いを通して全体計画ができるまでには相当の時間を要すると思いますが、事態によってはＯＢ現役一体となって、学生部その他関係方面に交渉することが必要となるかも知れません。

最後に私自身のことをひとつ。過去二ケ年の学部長という管理職も、任期満了で、本年四月からは再び研究教育に専念できることとなりました。学部長在任中は幸いにして大学としては平穏裡に経過しましたし、理工学、人文学に独立研究科あるいは独立専攻の形で後期三年の博士課程ができるなど、それなりに発展のみられた時期でした。しかし、どういう事なのか、在任中に、多数の名誉教授の逝去に逢いました。恐らく過去にもなかった有難くない新記録であったと思われます。特に経営学部関係だけに限ってみても、昨年七月に久保田音二郎名誉教授、続いて現役の、しかも経営学総論の講座主任をしていた重鎮の市原晋一教授を八月に喪い、本年一月には私の恩師であり、元神戸大学長であった福田敬太郎名誉教授を送りました。そして何よりもショックだったのは、法学部長として親しく共に仕事をしていた嘉納孔教授の急逝でした。盛者必滅、会者常離とはいえ、殊の外に世の無常を通感させられました。私もあと定年まで七年しかありません。この間に何としても研究成果をしっかりとまとめあげねばなりません。二年の間に専攻分野の研究水準は著しく高くなってしまいました。どこまでやれるか。再び助手に戻ったつもりで再出発を期しています。過日速水御舟展を見に行きました。そこで発見した御舟氏の「梯子を登り頂上に達することはそれなりの努力をすれば難しいことではないが、大抵の人はそこであぐらをかいてしまう。もう一度梯子を降りることのできる人こそ、真の勇者であり実力者である」という意味の言葉に感銘しました。何とか勇者のはしくれに加わりたいと思っています。

春の日も　早くくれぬと　かこつかな
ふみ見る道の　いそがるる身は

（本居宣長）

（一九八〇・三・一一記）

先輩登場

反復練習の功徳

旧一回生　藤井　茂

一、

「読書百遍、意おのづから通ず」という諺がある。昔の寺小屋では少年達に論語の素読を幾面も繰返させるという教育法を用いた。今からみれば、随分酷であり無理を強いたことになるが、その間におのづから体得したものがほんとの意味了解であったとすれば、最も効果の多い教育法であったともいえる。

そういえば、わたくし達の少年時代にもこれに似たことが行われていた。教科書を繰返し音読して、文章を暗誦したものである。「ハタ、タコ、コマ、マメ、マス、ミノ、カサ、カラカサ……」と今でも口をついて出てくるのはこうした教育の賜であったと思う。

わたくしは小学四年の時に英語を習い始めた。当時、郷里の青野ケ原に青島陥落によって捕虜となったドイツ兵の収容所があり、その通訳官に、単身で頼みに行って、週三回、ナショナルリーダーをテキストに教えてもらった。その教え方が読書百遍式で、毎回暗誦するまで読んでくることを要求された。それを忠実に守った結果今日の英語の基礎ができた。東京外語出の若い通訳官で、外交官試験に合格して東京へ引揚げられるのを駅頭で見送った時の情景が今でも忘れられない。きびしかった通訳官の目に涙が浮かんでいた。わたくしも半泣きしていた。

二、

こうした体験から今の教育法を見るとずい分進歩したものだと思う。小学校から大学まで、あらゆる施設が整い、参考書も備わり、教え方も親切丁寧で、しかも理に叶っている。これで理解ができなければどうかしていると思われる位である。

ところが、その効果は果してどうであろうか。あまりに便宜が多いために、反復練習という自助努力の過程が省略されるおそれなしとしない。脳細胞の表層には届いても、その奥深くに刻み込まれるところまで達しているのかどうか。一時、大学の講義でノートを取らせることは時間の浪費であるかのように言われたことがあるが、単に目だけで理解するよりも、目と耳と手先の神経を通して脳へ伝達する方がより深く刻み込むことになるのではないか。尤も、ここでは機械的にノートばかり取らせるというのではなく、適当に按配された筆記をいう。友達のノートをリプリントして試験の間に合わせるのは論外であることはいうまでもない。

要は、ほどほどに足り、ほどほどに足らぬ程度が、学生達に自発的研究心を起させるのによいのではないかと思う。

ドイツ語で、教育は（Erziehung）という。教育のほかに鍛錬の意味をもっている。教育は教える側の適切な指導と、教えられる側の自助努力（文字通りの勉強）が合一してはじめて完成される

ものと考えられる。

三

その点では、謡の道では教える側の指導と教えられる側の反復練習が常道となっており、教育の道に叶っている。神戸大学風韻会の学生諸氏が、僅か一年や二年の間に驚くほどの上達を示されるのは宇治先生の適切な御指導と、学生諸氏の弛まざる反復練習の賜であると思っている。

わたくし自身、この四十八年間という長い期間、宇治先生の御指導を受け、わたくしなりに反復練習を心がけてきた。時に本務や雑事に追われて心ならずも怠ったことはあるが、風韻会の会にはいつも出させて頂いたし、この頃では再び毎週御指導を仰いでいる。時時無本で出させて頂くが、そんな時には反復練習は不可欠であり、名古屋へ通う新幹線の中で夢中に暗誦するのが例である。こんな場合でも、以前から謡った回数の多いものほど暗記するのに容易であることはいうまでもない。にわかに暗記したものは忘れるのも亦早いことを身をもって体験している。

同じ曲でも繰り返しているうちに、曲の意味や味が変って行き、一層の深みを求めて精進する気が強まってくる。こんな折に、宇治先生から一声注意を頂くと、なるほどと合点し、その一声に何ものにも代え難いはげましを感じるのが例である。

学問の道では教える側に立って、苦心を重ねてきたが、謡の道では教えられる側にあって、導かれるものの幸を嚙みしめている。

「息の長さ」が求められる八〇年代

旧五回生　米花　稔

このごろ毎週欠かさず宝塚の宇治先生宅に通っている。定年まえ半年ごろからで、もう三年余になる。どこかでも書いたが叱られることのさわやかさに魅せられ、ひとりよがりを矯められることのきびしさで。謡曲をやっていてよかったと思うことである。四〇余年前に大学に入って宇治先生に手ほどきをうけ、卒業後両三年から、日常の忙しさにかまけて、ほとんどスリーピングのままであったものの、根まで枯らさず、また火種がのこっていたことの有難さをあらためて思っている。このことについて、とりあえず考えてみたいのである。

第一は、筆者の大学在学中に亡くなった父が商家の主人として、あたかも働きざかりの壮年で、かつ謡曲にもうちこんでいた頃であったことの影響があげられる。

第二は、戦時中大学の研究所に帰って以後も、謡曲に関する限りスリーピングであったにかかわらず、先輩藤井茂先生が同じ大学にいることとて、神大風韻会の催しに参加を呼びかけ、また大学教官による二声会（観世と宝生）によびだし、あたかも（戦後の人には理解しにくいと思うが）在郷軍人が簡閲点呼で召集されるようにスリーピングの眼を呼びさますことを続けられたことは忘れられない。それにしてもそのたびに我流の謡を臆面もなくひけらかしたもので

ある。

第三は、藤井先生のあと神大風韻会会長を引継がれた荒川祐吉教授もまた同じように小生への呼びかけを続けられた。多忙を口実に、時にサボリ心をもっても、いつもは断りきれずに出席しては、根枯れを防いでもらったことになった。

第四は、なんといっても、いい加減な謡にかかわらず、社中の特別の催しの会には、遠慮勝ちにも参加を呼びかけて、火種が消えないようにという配慮をいただいた宇治先生の何十年にわたる心づかいをあげなければならない。

今もなお辿たどしいけいこぶりであるが、物事を観る眼という限りでは、多少とも真物（ほんもの）が何であるかをつねに考えさせられるようになった。それにつけても、「息の長さ」の大切さ、その環境づくりの必要であるということを具体的に教えられている思いしきりである。

「風韻」へのひとことなるの故に、この小文を謡曲からはじめ、とりわけあつかましくもその私事とのかかわりをひけらかす結果となったが、ここでの主旨は「息の長さ」ということで、いま迎えた一九八〇年代を、そのことを思うゆえの導入部としたまでのことである。

この一〇年の環境の多様な激動を思うと、日本の経済・社会の各般にわたって、われわれお互に、眼まぐるしくよくこれに対応し、適応してきたものと思うのは、一九七〇年代を終えたいま誰しも共感していることであろう。国際的にみて、欧米諸国にくらべても、わが国のその対応ぶりは、結果的には相対的な意味ではあるが、それらの国々もこれを認めるところとなった。その結果、これまでひたすら日本はきらわれもの扱いの部分がすくなくなかったものの、今になってみると、日本の対応より、日本的なものについて、各国みずからすこし勉強してみては、というような落着いた見方に徐々ながら転じてきたのも、ここ両三年のことである。

そして八〇年代を迎えると、これからの国内外の環境の推移についての論議がにぎやかである。これからが予測不能とか、視界不良とかいう難かしさにかかわらず、すくなくも過去一〇年の環境適応の経験蓄積をある程度評価しての展望であることは共通しているように見うけられる。

ここから私見の試論が始まるのである。新年以来の国際情勢にみられるように、また懸案の石油問題にみられるように、八〇年代の環境は引続ききびしくかつ激動するであろう。しかしいまみたように、この一〇年の経済蓄積によって、今までのようにはふりまわされるようなショック的な行動には至らないであろう。いいかえると短期的な環境変化への適応能力は相当身についているといえるであろう。

しかし八〇年代のわが国の問題は、このような短期的な激動よりむしろ長期的な課題の山積のように思われるのである。エネルギー問題にしろ、国際的視点やら求められている産業構造の新しい方向にしろ、社会構造上の高齢化の問題にしても、短期に対応できるものでなく、長期的に息ながく一歩一歩その解を求めるつみかさねが必要とせられるものばかりである。このようなとりくみの「息の長さ」に余り習熟していないわれわれのように思われてならない。そ

れだけに、この「息の長さ」を可能にするような環境づくりがなにより必要なように思う。それはどのようなことであろうか。ここはいまそこまで議論さる場ではなさそうである。私事にかこつけて、「息の長さ」についてふれてみた次第である。詳しくはこれからとくと考えてみることとしたい。

父の追想

新四回生　里　井　三千雄

私事で恐縮ですが私の父、里井順次郎（観世流準職分。日本能楽協会会員）は昨年十二月二十六日、脳溢血のため急逝いたしました。享年七十六才でした。

宇治正夫先生と同じ大槻清韻会の同門でしたので、神大風韻会の諸生の中にも、父とご面識頂いた方もあり、大槻能楽堂等で父の謡仕舞等を観て頂いた方もあろうかと思い、ここに亡き父を偲んで一文を草する次第です。

父は大阪府泉佐野市の出身で、十六才の時に大槻文雪師（大槻十三師の厳父）の門をたたき、斯道に入りました。生まれつき、音楽の才能の芽はあった様ですが、その代わり小中学時代は、他の勉強は不得手だった事を私の祖母が見抜き、当時、父の伯父が稽古していた大槻文雪先生に入門させたとの経緯だったと聞いております。

その当時の内弟子の修業は、すさまじい猛稽古で、最初の内は中中謡は教えて貰えず、廊下の拭き掃除から始まり洗濯炊事等全く丁稚奉公と変らず、稽古を許されると今度は、先生の指導・訓練は激しく、その通りに出来ない時は、足蹴にされたり、扇で頭を叩かれるなど文字通り「たたきあげ」の教育で、後年になって父より、修業時代の辛かった事の追憶を聴いたことがあります。その後、父は上京し、大槻十三師に師事し、牛込二十騎町（現在の新宿区矢来町付近）の舞台で稽古に励みました。

当時の稽古仲間には、渋谷政寛、吉村直之、金子国治、そして現在の大槻秀夫先生（父の葬儀委員長をして頂きました）が未だ学生時代の頃、御一緒だった様です。

東京で約五年間の修業生活を終えて、父は故郷の大阪に帰り、師範となって昭和六年、堺市浜寺船尾町に居を構えて独立し、此処に「里井謡韻会」を創設しました。恐らく父の青春の頂点だった頃で、前途に夢と希望をふくらませて出発した事でしょう。翌七年、私の母と結婚しました。爾来、戦中戦後を通じて当地（昭和十七年、現地の浜寺公園町に転居）を根城に、泉佐野、岸和田等、泉南地域を中心として御弟子の指導育成と斯道における自己の研鑽、精進に邁進しました。

父は私から見ても不器用な性質で、これといった趣味、道楽はなく、文字通り謡曲の道一筋に徹しました。武者小路実篤の歌に、

この道より　我を生かす道なし　この道を歩く

という歌がありますが、正に父にピッタリの歌だったと今にして思

います。

既に昭和四十六年に里井謡韻会四十周年謡会を盛大裡に終了し、父は「八十才迄は現役で頑張るよ」と張り切っておりました。

元来が高血圧の体質で注意はしておりましたが、茲許、体調良く大阪市内又泉佐野への夜の出稽古も私共家人は、極力控える様に言っていましたが、元気に行っておりました。

亡くなりました二十六日も、本年最後の泉佐野への出稽古で、これが終わればゆっくり正月休みが出来るからと支度をしている最中に倒れたのであります。最後の瞬間まで稽古をしようとしていた父は、斯道に殉じたと言うべく壮烈な最期だったと私は考えております。一道に徹した生涯を貫いた父の人生は立派な人生であり、この様な父を持った私は誇りに思います。

「人の価値は棺を覆うて定まる」と申しますが、父の葬儀に多数の大槻清韻会の先生方を首め、観世会、能楽協会、そして愛しみ育てた大勢の御弟子、更には永年住み馴れた浜寺公園の皆様方に見送られ、皆様方より一様に申された、その円満な人柄と誰からも愛された性格で、父は幸福な人であったと思います。

父の芸風は、泉嘉夫先生の弔辞にもありましたが、よく大槻十三先生の発声法を摂取し、朗々と真直ぐに謡い上げる正攻法に徹していた様で、いささかの虚飾も嫌い、そして曲趣を自然の中に表現してゆく謡だったと思います。父は勿論、能や舞囃子、仕舞もやりましたが、やはり本命は素謡だった様です。

家庭での父は、割合いと無口で私共子供の教育には放任主義といいますか、母に任せ切りにして居りました。しかし、私共の成長を何時も何処からかは見守っていたと思われます。父は滅多に叱ることはなかったのですが、一度だけ厳しく叱られた記憶が鮮明に残っております。それは、私が中学二年生の頃、友人と初めて麻雀を覚え、夢中になり、友人の家で無断外泊をして徹夜で麻雀をやり、朝自宅に帰った時に父の雷が落ちた事です。やはり物事はケジメが大切だと言っていた父の方針があったのでしょう。

思えば、私が今日あるのも、やはり父との太く繋がれた絆を考えないでは居られません。私が神戸大学に入ったのも父と同門であった宇治先生に奨められたのが契機であり、卒業にあたり住友銀行に就職したのも父が同行謡曲部の師範をしており、同行内部に多くの知己を有していたからでもあります。

父に亡くなられて、今更に父の大きさ、偉さが偲ばれる昨今で、惻々としてその遺影が胸に迫ります。風韻会の方々にも父は謡会を通じ御世話になりました。又、葬儀の際も宇治先生、荒川祐吉教授を首め、風韻会の御関係の方々より多数御弔慰を賜わりました。父に代り本紙上で厚く御礼申し上げる次第です。最後に葬儀の当日、大槻秀夫先生に読んで頂いた弔辞の一部を御披露させて頂きます。淡々とした、父に語りかける慈愛溢れる名父で涙なくしては読めませんでした。今はただ、父の冥福を祈るばかりです。

『あなたとは、つい先日歳末助け合い能の折、お会いしたばかりでしたのに、今ではもうこの世に居られないとは、まるで夢のような気がします。所詮この世は夢でしょうか。併しあなたは何の苦しみも知らず何の悩みもなくこの世からあの世へ一またぎに逝かれたと言うことは実に美事な生涯だったと感じます。……中略……あな

たの天性の美声は大勢の観衆を陶然とさせた事でした。そして大槻定期能では、なくてはならない地頭として今日に至っていました。観世流能楽師として立派に活躍され、あなたにとって悔いのない生涯だったと信じます。一言の挨拶もなく、この世を去ってしまわれて今御令閨はただ忙然として居られますが、あなたは後顧に何の憂いもない事を見通されて安らかにお眠りになった事と思います。大勢の人達に懐しい想い出を一ぱいに抱かせながら、あなたは心安らかにお眠りになったのですね。

合掌

昭和五十四年十二月二十八日

大槻秀夫

◎文具ならなんでも揃う
◎謄写版用品・印刷・はん
◎事務用品・事務機

サヌキヤ

東灘区御影中町3丁目(バス道)
☎851-4087

スポーツ用品のことなら

御影スポーツ・センター店

神戸市東灘区御影本町4丁目7−17
阪神御影駅前
TEL (078) 811−6314

昭和五十五年度行事予定

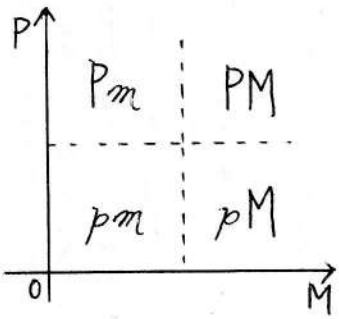
3月6日〜12日	春合宿
14日	慰労ハイキング
22日	歓送謡会
4月〜5月	新入生勧誘月間
5月3日〜5日	旧三商大合同発表会
中旬	新入生歓迎ハイキング
	ジュニア合宿
6月上旬	新入生歓迎コンパ
	学連春季発表会
7月6日	四大学合同発表会
8月上旬	夏合宿
10月下旬	学連秋季発表会
11月22日	自演会
12月20日	謡納会
	クリスマスコンパ

学生投稿

ＰＭ理論

姫路家次

ＰＭ理論というのを御存知であろうか。イレブンＰＭのＰＭではない。ここでいうＰはPerformance,つまり組織の目標達成機能であり、Ｍはmaintenance，組織維持機能のことである。わかりやすく言うと、Ｐは組織の目標推進のため能率を上げ仕事をどんどん進めていくことであり、Ｍは組織内の人間関係がスムーズになることである。このＰＭの機能というのは、リーダーシップの機能である(1)状況判断の機能、(2)集団統一の機能。(3)組織目標達成の機能。のうち(2)と(3)を言いかえたものである。そしてＰＭの組み合わせにより、次の四つの様態が考えられる。（図参照）Pmは仕事優先のワンマンタイプのいる場合で、仕事はよくするが人間関係はあまりよくない。pMは、人間関係はよいがなごやかすぎて仕事をしないサロン的なもの。pmは、仕事もしないし人間同士の仲も悪い。PMはその反対である。理想はPMにむかってめざすべきものである。神戸大学風韻会の活動が、リーダーシップの不足からスモールpスモールm化しないようにくれぐれもお願いしたい。



次に、リーダーシップのあり方は段階によって違ってくる。トップマネジメントにおいて大事なのは組織目標の決定である。ミドルマネジメントでは、組織目標の具体化、具体化した組織目標を各組織に伝えていくことへコミュニケーション）が大事になる。プライマリマネジメントつまり第一線では、人間関係をうまくしていくことと能率をあげること、すなわちＰＭ機能の増大が重要になる。風韻会のような小さな組織ではこれらはすべて一緒になっている。

最後に、ミドルマネジメントにおいて重要なコミュニケーションについて述べる。コミュニケーションとは組織のある成員から他の成員に対して情報を伝達する過程である。組織においてコミュニケーションは必須の要素である。コミュニケーションを円滑に保っておくこと、そこに流れる情報の取捨選択は、管理者の任務の内的過程における最重要問題である。

コミュニケーションの径路にはフォーマルなものとインフォーマルなものがある。組織には友情や社交を基礎にしたインフォーマルな社会関係が必ず発生する。このような場でフォーマルな径路では伝わってこない情報が伝えられ、そしてまたインフォーマルな径路

を通じてのみ伝達される。それから、フォーマルなコミュニケーションを補うものとしてインフォーマルなコミュニケーションが用いられるものであるが、さらに、インフォーマルな場が本来フォーマルな場で伝えられるべき情報の交換の場となることもある。

しかし、インフォーマル集団はフォーマルなコミュニケーションに対する障害にもなることがある。インフォーマル集団が組織内の決定力に影響を与えようとして、派閥、徒党に転化する可能性がある。これが情報の伝達に変化を与え、組織にとって逆機能現象をひきおこすことになる。

ピアノのおけいこ

伴　国

先日、あるピアノの先生が主催する、生徒たちのプチコンサートがありました。それぞれの演奏の前に、生徒が自分で書いた作文が読み上げられました。

「私はピアノが大好きです。教えて下さる〇〇先生も大好きで、おけいこの日をいつも楽しみにしています……。」

「私はピアノがあまり好きではありません。でも〇〇先生は好きです。今は、家が変わって先生の所に通うのが不便になりましたが、先生に会うのが持ち遠しくて、一生懸命練習しています……。」

「私はピアノがきらいです。何度もやめてしまいたいと思いました……。」

「私も早くおねえさんのように上手に弾けるようになりたい…。」

＊　＊　＊

ピアノを始めるきっかけは、お母さんから習いにいくように言われたか、または兄弟がやっているのに影響されて始めたものが多いようです。いやだけれどもお母さんがやれというので続けている子も多いようです。このような状況で、子供たちに接するピアノの先生も大変な苦労があることでしょう。いかにして興味をもたせ続けさせるのか。やめさせないようにするのか。また上達させていくのか。etc……。

何事も最初が大切です。基本が大切です。同じことを何度か繰り返しても継続していくことが必要なのです。たとえ退屈であってもおもしろくなくても。

皆、まだ「子供のバイエル」をやっている状態なのですから。

スキーツアー

紫　鳳

12月23日午後9時、大阪駅噴水前は我々以外のアホの同胞たちでひしめきあっていた。天気予報に淡い期待をかけて雪のない信州をめざして。色トリドリのスキーウェアに身を包み、顔をほてらせ、時間を待つ彼等。雪が無いのを知りつつ、彼らは何を求めて夜汽車に乗るのだろうか。しかし、それは我々4人にも言えることだった。おそらく我々も彼らのように何かに胸躍らせてニヤケた顔をしてい

たに違いない。乗車位置を間違えるというハプニングもあったが、恒男の見送りに涙して「クロヨン号」は動き出した。果してこの汽車の行く所に何が待っていることだろう。

ウダウダしている内にウトウトし、藪原のあたりだったか、目を醒ますと、聡が叫んだ。「雪だ。」夜汽車からみる雪景色は一種形容しがたい雰囲気がある。まぎれもない雪だった。南小谷も一面銀世界である事を信じたかった。千晴さんは空カンを枕に寝ていた。反田さんの姿は無かった。ある駅に汽車は停まり、後方のレールの切換ポイントを見て聡はTV番組のタイトルをつぶやいた。「遠くへ行きたい」それは、まさに旅情を絵に描いたような景色だった。二人は、その世界に吸いこまれてしまうかの如く、しばし言葉を失い見入っていた。

次に目醒めた時、雪がないのに驚き、更に目的地の二つ前の駅で降される事を聞き驚いた。コーヒーより効く早朝の空気のおかげで完全に目醒めた意識は、事態をしっかり把握し、皆の顔に絶望的な影がさした。一時間程遅れて着いた南小谷駅には、これまた悲壮感の漂う同情に満ちた表情の民宿の御主人がずっと待ってくれていた。民宿までの道中、所々に雪はあったが、この程度なら倉敷でも時に降る。初日のスキーに望みはなかった。朝食をとりロビーに出ると僕たちは何か悪い事をしたのだろうか、何のあてつけか「母と子のスキー教室」なる番組が楽しそうに放映されていた。

ここで恐怖の麻雀牌が登場する。こいつのおかげで始終”肩重いの僕”だったのだ。しかし、こいつの存在意義は大きかった。

麻雀にも飽き、お昼寝の反田さんを残して三人で冬山登山とシャレこんだ。目標は標高一、二六〇mのゲレンデの頂上である。さすがに登るにつれ、雪は積っている。中級コースまで来ると何とか滑べれる程の積雪量はあった。止まって氷ついたようなリフトを横目に最後の難関にかかった。コケる事数十回。ブッシュにしがみつきながらもついに登頂。約二時間の艱難辛苦を経て僕達が出くわしたものは、得体の知れぬ巨大な足跡と、真珠の実をつけたような樹氷の林であった。この自然の神秘に乾杯（と云ってもマイルドウォッカではない）し、千秋楽を謡った。すがすがしかった。天国に近い所にいるだけの事はあった。が、ボチボチ下山しようかという頃、僕のつま先に感覚というものは無かった。下山は45分程で完了。風呂場のお湯で足を洗った時の快感は今も忘れられない。

客は僕たちだけだった。夕食後、御主人は僕達のためにバイトの女子大生も交えて素敵なX'マスパーティーを開いてくれた。喫茶部が開店休業だったので出がらしのコーヒーだったけど、でも御主人の気持ちが嬉しくて生ぬるいコーヒーも熱く胸に染み渡った。

二日目も麻雀した。しかし窓の外は灰色の世界。そうなのだ、雪が降り続いている。明日に望みをたくしてスキーを調整した。が、児島さんの靴が入る板は聡が使うはずだった板しかなく、翌日、180cmの男が160cmのボロスキーにもて遊ばれる事になるのである。

信州の朝は夏も冬もフトンが恋しい。三日目の朝もそうだったが、窓の外は雲一つない青空で、雪が心配で飛び起きた。一応、雪は残っていたが、あのオテントさんでは長持ちしそうになかった。朝食時、リフトが動いているのが見えた。少し向こうのコルチナ国際スキー場では滑べれるという話である。いよいよ滑べれるのだ。心ウ

キウキ、初めて乗るリストに心臓ドキドキ。そして来た、雪のあるスキー場に。しかし、スキーをつけ、早速中級者コースを滑ろうとは先輩も酷な事を言う。おっかなビックリ滑り始めると先ずコケた。コケる毎にスキーがはずれる。これ幸いと、結局斜面がゆるやかな所までかついで降りた。そこから斜滑行。だが当然ボーゲンなどできないし、止まる方法さえ知らず、滑っちゃコケてキックターン、このＶＳＯＰで何とか下まで降りていった。しかし、平面でも歩く事さえままならない。エッジが何なのかさえわからずにスキーに来た自分が情けなくなった。必死の思いのカニ歩きでリフトに乗って一安心するやいなや、一つ前に乗ったはずの聡の姿が突然消えた。スキーが鉄柱にひっかかり転落したのだ。そのゲレンデでも、ブッシュや石、その他のアクシデントで大きく遅れを取り、あせって滑るとヒドイ転び方をした。足は無事だったがスキーがめげた。仕方なく先輩たちが待っている食堂までとぼとぼと歩いて降りた。食後、初心者コースでボーゲンの練習をしたが、どうしても要領を得ず、何とか形になったのは二日後の六甲山人工スキー場においてであった。しかしいい汗をかいたように思う。転倒する時、顔から雪につっこむのは何とも言えぬ爽快な味がある。一見、アブノーマルな喜びに思えるかも知れぬこの奇行に、僕はスキーの醍醐味を見つけた。帰りのリフトは既に動いておらず、仕方なしに歩いて下山した。部屋に落ち着いても、まだ足はスキー靴にしめつけられ、床につくまで足カセをひきずっているような感触が残っていた。

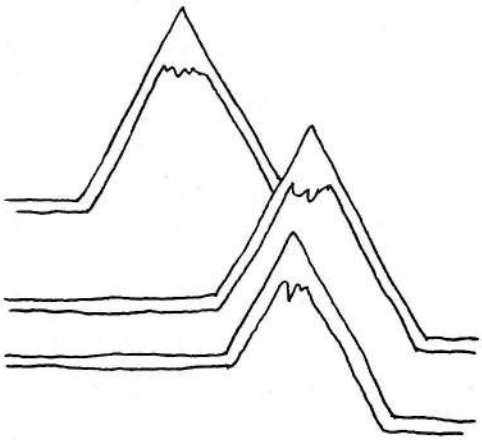
昨夜遅くまで麻雀をしたせいもあって、四日めは皆疲労の極致にあった。雪も降り、コルチナも滑べれるという話だったが、結局その日に帰る事になり、土産屋に行ったり、年賀状を書いたり、昼寝をして過ごした。駅まで送ってくれ、地酒を土産にくれた御主人との別れも名残り惜しいものとなった。信州の雪は冷たく、そして人の心はとても暖かだった。

楽しみにしていた糸魚川の釜メシは既に売り切れており、結局、幕の内と相なったが、千晴さん一人グロテスクな寿司をうまそうに食べていた。富山で途中下車し、茶店へ行くことになったが、そこのコーヒーの高いこと、おまけにＴＶゲームの陰険なこと、腹が立って伝票に惨々悪態をついて、ドアの札を「準備中」に裏返して、意気揚々富山を後にした。車中、買ったばかりのカードで暇をつぶした後、明日のために余力を蓄える事にした。帰りの汽車の中で、六甲山人工スキー行きの話がまとまったのだ。そして、とうとう上級者の妨害にもめげず、一応中級者コースを完滑するまでに至ったのである。六甲山を知らないスキーヤーなんて……。

ここまで話して、何のためにわざわざ高い金を出して信州まで行ったのだろうと不思議に思う人も多いだろう。結局、むこうに4日もいてスキーをしたのは1日だけ。そして神戸で滑べるという事になるのならば、初めから六甲山にツアーすればよかったのだと冷笑している人もいるかも知れない。確かに雪のないスキー場に重い荷物をかかえてヒーコラ行くのは、常軌を逸した行動だろう。しかし、お決まりの道を歩いて何がおもしろい？真に心をときめかすものはこの先どうなるのか見当もつかぬ「常」を超越した世界にあるのだ。突然の出来事に喜び、憂いに沈み、一驚を喫したかと思えば、深く感動する。生きている実感をヒシと感じる瞬間だ。千晴さんの瞳の

輝き、反田さんの驚愕の叫び、聡の歓喜に満ちた笑顔。そうなのだ、スキーだけが目的じゃない、お互いに意外な一面を発見し再認識する。人の心と心が触れ合い、素敵な水色の笑顔となる。和――僕たちはこの人と人との心の和を求めて、遥かなる白銀の世界へと向かったのだろう。お互いの心を理解し合えるのは素晴らしい。

まだまだ書きたい事はたくさんある。枕を敲てた思い出話、四暗刻の事、ギャラクシアンの事……。ここに書いた事もかなり中途半端に終わっているし、紙面を意識した割に結構枚数もかかり、臆面もなく長々と支離滅烈な文章を書いてしまった。お許し下さい。イヤァー、スキーって本当に愉しいもんですね。それじゃ、またこの冬いっしょに行きましょう。それまで白銀よ



模擬店「猩々」報告

A13　能勢恒男

昨年も例年通り十一月に六甲台祭が開催され、風韻会でも、十七日、十八日の両日、『猩々』の屋号で模擬店を出店致しました。風韻会では、ここ数年、串カツ屋をやってきましたが、今年はちょっと変ったことをやってみよう、という声が多かったので、思いきって『おでん屋』に挑戦することになりました。

なにぶん初めての試みとあって、準備の段階から大変でした。先輩から、ここ数年の資料をいただいたのですが、それらは、みな串カツに関するものばかりで、おでんに関しては、材料をどれくらい仕入れたらよいか、価格をどれくらいにすればよいか、などまったく未知の状態から出発しなければなりませんでした。しかし、前日には、何とか出店できるところまでたどりつくことができました。そして、いよいよ当日。当日に関して、我々がもっとも心配していたのは、何といっても空模様。この日は、日頃の行いが悪いせいか、どんよりとした空模様。いつ降るか、いつ降るか、と気にしながらの営業準備でした。そして、更に悪いことには、当店のまわりに同業者、つまり『おでん屋』がずらり。くじ引きで決った場所とはいえ、ア然としてしまいました。結局、その日は昼頃から雨が降ったりやんだりのいやな空模様が続きました。我々がもっともショックを受けたのは、翌十八日の朝でした。というのは、一晩中降り続いた雨で、ガスコンロ、椅子、机など、店のものすべてが水びたし、

おまけに、店の前には大きな水たまりができる有様。予定していた買出しはやめて、前日の残りだけで店開きするというひどい状態でした。この日、昼前には恨みの雨もあがって、四時頃には完璧に売りつくして、いざディスコへ。

今、思い出してみると、本当に苦難の連続の出店でした。しかし、みんなでスーパーに買出しに行ったり、食券を作ったり、楽しい思い出もたくさんできました。そして、何といっても、わずかではありましたが、利益を上げることができて、ホッとした次第です。

最後になりましたが、お忙しい中、お出で下さった先輩方に、厚くお礼申し上げます。

模擬店決算報告

部員負担	36,480円	出店料	7,000円
売り上げ	66,354円	材料購入費	49,034円
	102,834円		56,034円

※ 純利益　46,800円

バイキング〔お一人様〕
¥850
おネダン共通
＊お料理はセルフサービスです。
お好きな料理をお好きなだけ
お召し上がりください！
3 ファッションパブ カンタベリー二番街
☎332－5235
プレイ・パブ ☎331-3766
カンタベリーハウス

あしあと

昭和五十四年度
B29　反田雅之

三月

二日（金）～九日（木）　春季合宿
於和歌山県日高郡由良町　旅館「中長」
練習曲　一年「養老」「嵐山」「簸」「東北」「殺生石」「鞍馬天狗」「小鍛冶」。二年「高砂」「頼政」「井筒」「三井寺」「鉄輪」「放下僧」「安達原」
宿が海の前で、これは新鮮な魚が食べれると大張り切りだったクラブ員も、毎日の、さしみ攻勢には、いささかげんなりしてしまった。

十一日（日）慰労ハイク　（明石城公園にて）

十七日（土）歓送謡会　於学生会館六階ホール
舞囃子「高砂」（岩崎）「熊野」（黒川）「松虫」（遠藤）「熊坂」（伏見）他、素謡九番、連吟二番、仕舞二番
宇治先生、荒川、米花先生、井口、栗岡、杉本、原、段野、佐々木、木村富、寺本、児島、小島、伏見、岡崎、山岸、飯田、松本先輩が参加して下さった。

四月

上旬～下旬　新入生勧誘月間
個人アタックにつぐ、個人アタックで、男子五名、女子三名が、入部し、幹事長胸をなでおろすことしきりであった。

五月

三日（木）～五日（土）　旧三商大交歓会　一橋大主催
第一日目、多摩動物園へ合同ハイク、二日目、藤舞台にて発表会後、コンパ、三日目、三校対抗ソフトボール大会等々……。そして加えての東京見物に、皆、ぐったりしてしまった。

十三日（日）～十五日（火）　ジュニア合宿　於摩耶山王蔵院
初めての合宿のせいもあってか、一年生は大にぎやか。たいへん楽しい合宿であった。伏見（政）先輩が参加して下さった。

六月

二日（土）　於六甲パーラー
若いOBの方が多数参加して下さった。さすが若い一年生、お酒があっという間に無くなってしまった。

十七日（日）　関西学生能楽連盟春季大会　於大槻能楽堂
仕舞「敦盛」「経正」「杜若」「小袖曽我」「合浦」他、連吟二番。

七月

一日（日）　四大学合同発表会　於上田能楽堂
素謡「東北」、仕舞「清経」「田村」他五番。中でも、各校二三年男子の合同素謡「鞍馬天狗」は厚巻であった。
他方、神戸女子薬科大が部員不足の為、今回限りで休部、まことに残念であった。

七日（土）　謡納会　於部室

八月
三日（金）～十日（金）　夏季合宿
於兵庫県美方郡美方町城山　民宿「イヌワシ」
練習曲一年「竹生島」「菊茲童」「経正」「田村」「羽衣」「小袖曽我」「富士太鼓」「猩々」「紅葉狩」二年「賀茂」「敦盛」「清経」「熊野」「善知鳥」「班女」「舟弁慶」「鵜飼」
木村富・林先輩の御参加、寺本、岩崎、遠藤先輩にお電話などで激励を頂いた。
ちなみに、合宿費は、一泊三食三、五〇〇円、交通費五、〇〇〇円、その他合わせて、三五、〇〇〇円ほど。

九月
一日（土）　ＯＢ会懇親会　於　蘇洲園
ＯＢ会が出来て初めての懇親会。あいにくの雨となったが、多数の先輩が参加された。

十月
二十五日（木）　古典芸能発表会　於学生会館六階ホール
詩吟・邦楽部が参加

十一月
十一日（日）　宇治風韻会

十七日（土）十八日（日）　六甲台祭園遊会
不思議に毎年雨にたたられる園遊会。今年も雨の中で行われたが、売上げは順調。まさに“円”遊会の二日であった。
荒川先生、木村富、伏見政、山岸、岩崎先輩に我が『猩々』のおでんをご賞味していただいた。

二十四日（土）　五十四年度秋季発表会　於学生会館六階ホール
舞囃子「高砂」（田中邦）「敦盛」（反田）「松風」（佐野）素謡八番・連吟二番・仕舞二十番。
宇治先生・藤井・荒川先生・杉本・里井・牧・堤・原・佐々木・戸次・尾島・志智・木村富・児島・伏見政・山岸・岩崎・遠藤・伏見和・黒川先輩が参加して下さった。後の懇親会にも、十六名の先輩が参加して下さった。

十二月
八日（土）　神戸商科大学自演会賛助出演　於上田能楽堂
連吟「笠ノ段」他仕舞三番。

九日（日）　関西学生能楽連盟秋季発表会
仕舞「兼平」「班女」「王鬘」「融」他連吟二番

二十二日（土）　謡納会　於部室　その後クリスマスコンパ

新役員紹介

幹事長　T30　藤裏　聡
副幹事長　L30　山下　美登利
渉外　A13　能勢　恒男
渉内　J30　門之園　辰志
文総　L30　小谷　直子
会計

コンパの御用意は当店で
酒類・食料品商
みどりや
神戸市灘区六甲台町６番２１
（六甲団地の下）
電話（861）0535番

お好み焼
各種定食
一品料理
よし田
第一六甲センタービル２Ｆ
阪急六甲山側　841－9588

写真撮影スタジオ
証明書写真
出張証明写真
櫻井写真館
阪神御影駅北100m　TEL（078）851-2739

大衆酒場
宴会場完備
ぜい六
学生さん歓迎
ビール１本 290円・お酒１本 190円
市バス六甲口南　TEL（851）4787

幹事長就任にあたって

T30　藤　裏　　聡

これから一年間僕がこのクラブの中心に立って先導して行かねばならないという一つの思いが頭の中を右往左往し、その思いが一つであるというのに、ある時は希望に満ち、ある時は責任感に縛り上げられ、又ある時は不安に追いまわされるという具合に幾つもの重なり合った感情を生み出すのです。未知なる物に直面した時に人は今の僕と同様な感情を抱き、そして緊張するのでしょう。彼は痛々しいほどに張りつめた冬の空気の中にいる様な緊張感に包まれ、それまで自分の頭の極小なる一隅をも占有した事のない問題で頭を悩ます事になるのです。僕とても彼らの例にもれるわけではないのです。しかし、その真新しい問題を取り扱おうとして別の問題、というより感情を押さえられるはずもなかったのです。それは基礎作りに当る作業を怠った事に対する怒りなのです。その作業とは、即ち考えるべき時に考えようとすることであり、それを軽視する事が今になって僕に最大の悩みを与えたのです。例えば、権利と義務についてといった類の議論は、僕のような卑近な考え方しか持たない人間ではなく、もっと崇高な精神の持ち主によって、少なくとも人生とか愛とかについて真剣に考え悩んだ人達によって為されるべきだと決め込んでいたのです。従って、そうした物のほんの一片を拾い上げる事にも自ら骨を折ろうとはしなかったのです。まして難しい理論をやたら導入してこの貧弱な頭の中で解析したり組み立てたりしようなんて思いもしなかったのです。しかし実際に権利や義務に関連した問題が生じると、根元から追究せざるを得ないものなのです。他の殆ど全てについても、これと同じ事が繰り返される訳ですから、それはもう僕にとって最大の悩みになるのです。これが世間で言うところの「たたり」なのでしょう。しかしこの事が逆に僕にとって喜ぶべきであるという事にも気付かねばならないのです。僕がこの大役を預からなかったなら一生の間に考えることもなかったかもしれない種々の問題を考える機会を与えられたという事に感謝すべきなのです。

こうして僕は一層緊張感を強くして行くのです。このピンと張った冷たい空気の中に居て凍えそうかと言うと、そうではなく暖かいものさえ感じるのです。それがクラブという人間達の集まりの和であるのです。僕は幸いにも最も出力の大きな和という位置エネルギーを元にして動き始めることができるのです。しかもこの和は不思議な位置エネルギーであり、減少する事を知らず、雪だるま式に増加し、同時に運動エネルギーをも生じさせるのです。僕は一人ではないのです。

誤解を招く恐れがありますので、ここで付け加えておきます。僕は、悩もうと思っているのではなく、むしろ幹事長という立場で、このクラブの伝統を守りながら、できる限り楽しみたいと思っているのです。

第一回風韻ＯＢ会総会報告

一　とき　昭和五十四年九月一日（土）午後三時より

二　ところ　神戸大学六甲台本館玄関前に集まり、記念撮影の後、神戸阪急御影駅上の蘇州園にて会食

三　出席者

（敬称略）藤井茂（前会長）、荒川祐吉（現会長）、西尾雄一（旧5）、保坂昌（新1）、杉本孝昭（新3）里井三千雄（新4）、牧千雄（新4）、堤文男（新6）西野公三（新6）、原敏郎（新9）、松岡誠夫（新9）久下昌男（新11）、段野治雄（新13）、戸次威左武（新13）、尾島洋三（新15）、河野豊（新20）、木村富士夫（新21）、寺本博行（新23）、伏見正章（新25）田中恭子（新25）、吉本勢津子（新25）、遠藤隆（新27）、田中千晴、反田雅之（学生）　以上24名

四　会費　七、〇〇〇円

時折雨のおちてくる曇り空の下、六甲台本館で写真を撮った後、荒川先生より最近の学校の現状等をお聞きしました。各自再び蘇州園に集まり食事をとり、藤井先生、荒川先生の御挨拶に始まり、諸先輩の近況等の話へと続きました。今日都合により御欠席なさっている米花先生を風韻ＯＢ会の会長に決定し、来年（今年）の幹事を決めたりして、なごやかに談笑しつつ八時過に散会。なお、九月一日という日が、学校の先生にとっては参加しにくいのではないかとの反省も聞かれました。

決算報告書

収入		支出	
今期部費収入	207,240	先生謝礼	174,000
大学援助金	50,000	三大学発表会	10,000
先輩寄付金	244,990	四大学発表会	17,000
風韻広告料	55,200	秋季発表会	122,613
発表会役料	225,000	歓送大会	203,560
合宿残金	3,420	学連費	24,000
Ｓ５３年度猩々売上	47,917	学連舞台料	18,770
繰越金	322,097	風韻印刷代	110,000
		通信・交通費	80,380
		文具代	7,639
		写真代	15,455
		Ｊｒ合宿茶話会	5,403
		その他	30,787
		来期繰越金	336,257
	1,155,864		1,155,864

文責　田中邦子

昭和５４年度先輩寄付金芳名簿

（但、発表会、合宿、コンパ等の場合は省略させていただきました）

順不同・敬称略

近藤哲久	林一馬	木村升治
道場清隆	田中恭子	青木又雄
佐々木裕	児島新	戸次威左武
河野豊	飯田博江	内海実
西尾雄一	向浜幸雄	小杉岩蔵
仲巌	和田慎三	浜本彦
酒井孝子	松岡誠夫	白石秀夫
梶原良彦	原敏郎	小野山久美子
保坂昌	高島千明	内海隆彦
吉本勢津子	福永肇	久下昌男
植田勝弘	小山末夫	清水由民
西野公三	野田和則	吉井一
伏見正章	伊東寛	下良晃彦
山口久之	段野治雄	金子安蔵
末広雅彦	杉本孝昭	永江幹雄
松田幸次郎	寺本博行	寺下章彦
安藤幸雄	林哲夫	堤文男
志智敏一	伊藤欣二	山口剛
牧千雄	下田美保子	中崎和美
夏目隆	有田直行	有田栄一
木村富士夫	香西千秋	山口隆夫
浅井啓三	小谷忠夫	計

ご支援を賜わりありがとうございました。心からお礼申しあげます。

部員一同

OB通信

○臼石秀男氏（旧七回生）

昭和十三年卒業以来既に四十一年。卒業後十年位は自宅でうなったり、会に出かけたりしていましたが、特に終戦後は家族の増えたこと等々で練習からも遠ざかっています。但し、東京謡会の人達とのつきあいはやっています。

印象的であったことは、戦時中、ジャワ島バンドン市、ジャカルタ市での夕方の練習を、インドネシアやオランダ婦人から日本音楽は良いと賞められたことです。音符とは異る音楽でも芸術として味わってくれる異民族の鑑賞力を神に感謝した次第でした。

宇治先生、藤井先生、他諸先輩に折あればよろしくご風声下さい。

○蔦谷精二氏（新六回生）

現在、ジャカルタに転勤しておりますので、よろしくお伝え下さいませ。

○福田好男氏（新九回生）

本人は現在ブラジル在住のため出席できません。御案内頂きありがとうございました。皆様方にどうぞよろしくお伝え下さい。

○田中恭子氏（新二十五回生）

今年は中学一年を担任しています。一学年十一学級のマンモス校になってしまって、なかなか生徒の名前が覚えられません。生徒は元気がありすぎて騒がしく、静かにさせるまでにこちらの声が出なくなるありさまです。皆様も十分にノドを鍛えておかれた方が何かの役に立つと思います。がんばってください。

○井戸正二氏（新二十七回生）

仕事の都合上、コンパには出席できません。コンパが成功することを祈っております。

話は変わりますが、みなさん元気でやっていますか。新入生も入り活気あふれている姿が目に浮かびます。諸君の健闘を祈っています。

この欄は、日常の発表会等のお知らせの御返事の中から、掲載させて頂きました。

マージャン
六甲すずめ荘
神戸市灘区森後２－３
電話（078）841－9532

文具・事務用品・コピー
文具のスズヤ六甲店
国鉄六甲道メイン六甲ビル２階
TEL（078）821－6606

登録商標
御菓子司
常盤堂
神戸市東灘区御影中町
電話神戸(851) 4677番

御集会、コンパ、宿泊にどうぞ
六甲パーラー
六甲団地西
TEL 861－6890

伝言板

○昭和五十四年
三月　鬼本ますみ（旧姓中井・昭和五十三年卒）
さん御結婚！
五月　藤森啓子（旧姓岡崎・昭和五十二年卒）
さん御結婚！
十二月濱出陽子（旧姓林・昭和五十二年卒）さん
御結婚！

○新二十八回生（昭和五十五年卒）就職決定
田中千晴　住友商事
戸田真弘　日産自動車
岡田裕子　教員
日下恵津子　教員
福岡真裕子　教員

編集後記

◇「風韻」第二十号をお届け致します。お忙しい中、原稿をお寄せ頂きました皆様方に深く御礼申し上げます。

◇80年代の開幕。「風韻」も本誌で二〇号になった。それだけで歴史となって続いていく。

◇時は流れて風が吹き
神戸大学風韻会
明日はどこまでゆくのやら
ゆれてどこまでゆくのやら

編集委員　戸田真弘
岡田裕子
日下恵津子
福岡真裕子
田中千晴

昭和55年 6月 7日 印刷
昭和55年 6月10日 発行
発行所 神戸大学風韻会
神戸市灘区六甲台町
印刷所 みなと出版印刷株式会社
神戸市灘区浜田町2丁目5の3
電話 821－8331(代)

雑誌からコピー印刷まで……
みなと出版印刷(株)
阪神新在家下車東150米高架下12-11
TEL.(078)821－8331(代)

焼肉料理・中華料理
金剛山
神戸市生田区北長狭通2丁目1
三宮生田神社前筋

古書買受・事務用品
(御報　参上)
小牧文具書店
神戸市東灘区御影本町2丁目15－25
電　話 851－3286

NOWなSOUNDで 今夜はあなたも
レッツ・フィーバー!
コンパ・ダンスパーティ
ご予約OK!
★ごあんない
お一人さま
女性¥1.250
男性 ¥1.350
お料理4品
コーラorミネラル
TC
全て込みで
G＆Gボトル……3,200エン
メニュドリンクオール… 300エン
その他いろいろ
三宮生田神社前
パブ&ディスコ
ニュー ジャンボパブ
TEL332-0775
(10名様以上のご予約の方にはG＆G1本サービス)